

浄土

regulady
KJTB
1996-7



1996 7 July

法然上人鑽仰会・発行



咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。

ちょっと切ない、なつかしい。

いろんな話をしたり、聞いたり。

そんな何気ないことが、人と人との
固い絆の第一歩。

それぞれの人の、それぞれのお話に
花を咲かせるお手伝い。

安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。



0088-82 (無料)

または 0120-0088-82

●受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

連載

名刹を訪ねる

撮影・小堀祐二

一行院 千日谷会堂

首都高速を見下ろす一行院の塔。右奥のネオンは神宮球場だ

地上八階、地下一階のお墓の塔。
大きな窓が四方にあり、塔内は明るい



塔の入口には涅槃像が、最上階
には阿弥陀さまが。その両脇は
お骨一時預り用口ツッカーが並び



一行院の歴代住職も檀家さん同様、
ロッカーのお墓だ。また地下には
三界萬霊のロッカーがあり、入り
きれなくなるとここに合葬される



塔の前に立つ二万日回向の石碑



一行院
千日谷会堂



コンクリート作りで、しかも本堂
や庫裏が一緒の寺は当時非常にめ
ずらしかった。左は高速道路(上)
宣伝は一切していないが、千日谷
会堂は著名人の葬儀や社葬がよく
行われる(左)

新本堂の記念につくった経本
(写真は平成の改訂版)



一行院の開基、永井直勝像

浄土

1996/7月号 目次



カラーグラビア 連載<名刹を訪ねて>……写真＝小堀祐二	3
私と念仏との出逢い	別府信空 8
童話 くも吉とチョウ	斎藤耕善 14
御法語に聴く	22
表紙は語る 野草・花ごよみ	石井敏之 27
名刹 一行院	真山 剛 28
コラム	37
外国で暮らして	高僧光隆 38
豆知識	47
お盆のふたつの謎	藤井正雄 48
続・午後の日差しの中で	吉川英明 54
コラム	60
Jフォーラム	61
事務局便り	68
編集後記	70

表紙題字＝浄土門主 中村康隆 祝下

表紙撮影＝石井敏之

アートディレクション＝近藤十四郎

私と念仏との
出逢い

別府信空

近頃の自然科学の進歩はすさまじいものがある。NHKが生命四十億年の旅として放映している生命の誕生などは、生命の神秘のベールを次々とはがしてゆき、人間の尊厳をおびやかすことしばしばであるが、現代人であるかぎりこの方面から目をそらすことはできない。宗教家たるものは勿論である。

ガリレオ・ガリレイの昔から、科学と宗教は争いを繰り返して来たが、浄土学においてもその要素はなきにしもあらずである。

念仏に根幹を定める以上、法然上人の申されたことは絶対であるが、法然上人の教えの中に、如何に現代科学を受け入れるかという努力を忘れてはならないと思う。

昭和三十六年、東京での教学大会で「往生の念仏と人格形成の念仏」という試案で研究発表をして、大正大学の服部教授と論争をした。教授は私の発表を「少なくとも学問（浄土学）ではない」と批評された。私は、大谷大学で山口益先生について仏教における空とはどんなことかという理解はある。また念仏にしてみれば、こうしか考えられないということとで激しく反論した。東北大学の平野先生は、「発表者の意見に絶大な敬意を表する。これからの宗学はこのようであればならない」と支持して下さった。

私はこの発表を最後に学問の世界から身を引いて、田舎の寺の和尚となって念仏を称えながら荒れ寺の復興に専念して来た。今更重箱の隅をつつくような宗学論争をするつもりはない。それよりもこの自然科学の驚異的進展を宗学の中に導入する心の柔らかさを持たねば宗学は存在価値を失なってしまうと思う。法然上人の教えも、命というものを離れては

成り立たないのだから。

幸い浄土宗には明治、大正期に山崎弁栄という偉大な宗教家があらわれ、自然科学を取り入れて法然教学に息吹を吹き込んで新しい命とした。

私は寺に生まれたものでなく、法然上人の教学を知ることなしに、念仏とは縁のない所で成長したから、全く自由な形で念仏にも法然上人の教えにも接することができた。

昭和二十三年の春三月、私は豊前善光寺の本堂に駆け込んでお籠りをさせていただいた。住職の菅野真定上人は熱心な念仏者で各地に布教されていて、この時は不在であったが、念仏者でもある御夫人は広い心の持主だったので、私のお籠りを気持ちよく許して下さった。勿論同じ村に住む者として、何処の誰という素性に問題はなかったこともあったであろうが、私のお籠りを独断で許して下さった。

私は昭和十八年の一月八日、満蒙開拓指導員養成所という将来の満蒙開拓の団長となるべく訓練される学校に入ったのだが、この草深い茨城県の鯉淵村に大変な思想家がいらっしやった。その人は加藤完治という一時代を指導した満蒙開拓の柱石であると共に大変な哲人でもあり、教育者だった。

この加藤先生と、これを助けた阿部國治先生のお考えを基本にして、石黒忠篤先生や橋本傳左衛門先生などが、全く自由な、専門学校令に縛られない私学として教育をなさって下さった。今から考えてみると全く素晴らしい教育内容であった。

加藤完治は東大農学部出身でもあり、剣の達人でもあった。直心影流の正統者山田次

郎吉に教えを受け、日本の将来を考えて、農村子弟の育成に心血を注いで来られた方であり、阿部國治は東大英法、印哲を共に首席で終えられながら、学者の道を進むことなく、如何に生きるかを求めて加藤完治の許で農村子弟の教育に、また満蒙開拓団の組織作りに心を砕かれた方であった。

この二人の教育者によって育てられたが、不幸にも敗戦のために第一期生である私は卒業することなく、この学校は廃校になってしまった。しかし三年間に培われたものは大きな成果を残した。私が宗教に進むことのできたのは、この学校の教育を受けたおかげだと思っている。

昭和二十三年豊前善光寺の本堂にお籠りした頃、養成所を離れ、心の師である阿部先生ともお別れして、心の空白を感じていた私は、それを補うべく親戚の禅寺へ座禅を組ませてもらいに通っていた。

親戚の心安さから老僧は大変親切に、またやさしく坐禅の手ほどきをしてくれた。この松濤という和尚は、若い時に永平寺で長い間本格的な修行をされた方だったので、指導が適切で、禅というものが段々おもしろくなって来ていた頃だったが、如何に生きるか、生くべきかということに対しては、なかなか解脱は与えられず、意を決して今までの人生の総決算をと思つて、死を覚悟してのお籠りであった。生きる自信が持てるまで断食をしてお籠りをしようと決心して入堂した。

最初の一日は静かに坐禅をしていたが、二日目の朝、いつとは知れずに木魚を打ちなが

ら念仏を始めていた。ところが、木魚のリズムに乗って念仏する声にさそわれて、まる一日、二十四時間一休みもすることなしに念仏ができた。

二十四時間念仏した翌日が日曜日だったので、日曜礼拝に来る檀信徒の方達の邪魔にならないようにお堂を出て休息し、また一同が退堂の後入堂して一心に念仏した。いつとは知れず昼が過ぎ、真夜中になっていた。

灯明も焼香もない真の暗闇の中で一心に念仏していた私の双眼から熱い涙が滲み出してきた。それと同時に有り難いという感情が湧き起こってきた。これはかつて私が味わったことのない感激の涙であり、法悦の涙であった。

これから先の人生は、このお念仏を称えながら生きてゆけばいいのだという決心がついた。この時は五日間断食をしてお堂を出たが、それ以来念仏とは離れられない身となり段々と念仏の縁が深まり、五年ほど経過して出家をする決心がついて、茨城の恩師阿部國治先生に出家のことを相談に行った。

それは昭和二十七年の夏のことだった。先生に出家したいと伝えると、先生は「俗より出でて俗よりもきたなしと言うから、坊さんにはならない方がよかろう」とおっしゃられた。この言葉を聞いて不満な顔をしたであろう私を見て、「しかし、山崎弁栄の系統の人に師事できるのだったら話は別だ」とおっしゃられた。実は山本空外という山崎弁栄上人の系統の人ですと言うと、先生は「それなら双手を挙げて賛成だ。早く出家して、この私を救ってくれ」とおっしゃられた。

先生はどうして弁栄上人を知っていらつしやるのですかとお尋ねすると、満蒙開拓団のことで全国を巡っていろいろな人に逢つて話を聞くうちに、光明会という山崎弁栄の教えを受けた人々が一番しつかりした思想を持っているので、山崎弁栄とはそも如何なる人かと、早速著書を買つて読んでみると全く素晴らしい。山崎弁栄の宇宙観世界観は日本一であり、世界一だとおっしゃられた。

先生は浄土宗の人ではない。全く自由な立場で山崎弁栄に接し、そしてその教えの素晴らしさに驚いたのである。東大の英法、印哲を共に首席で出られ、宛克彦の愛弟子でもあつた先生の発言であつてみれば、金石の重さがあるお言葉で、私は喜び勇んで山本空外の弟子として出家し、念仏を称えながら仏教大学、大谷大学大学院と学んで、今年で念仏を始めて五十年になる。恩師の「山崎弁栄の系統の人に師事できるのなら双手を挙げて賛成する」とおっしゃつて下さつた一言で、私の出家は決まり、また弁栄上人の十二光体系によつて法然上人の本願の持つ功德もよく理解できた。

今日法然上人の教学をより徹底させるには、山崎弁栄を抜くことはできないと思う。そして近頃の自然科学の生命の神秘を、四十億年の命の進みを選択本願の思想の裏打ちとすることなしには、これからの法然の教学は輝かないと思うがどうか。

(広島・法然寺住職)

A decorative border with a repeating floral and vine pattern runs along the top, bottom, and right edges of the page.

山日文芸児童文学入選作品

童話

くも吉とチョウ

斎藤耕善

木の枝から枝へ一匹のクモが巣をかけています。名前をくも吉といいます。体の色はうす茶色で全身に細かい針のような毛が生え、見るからに無気味な格好をしています。すが、それでいて気の弱いにくめないクモでした。

「おーつ寒い!! ああおながすいたなあ、プヨでもいい、一、二匹かからないかなあー。」

と、くも吉がそんなひとりを言をつぶやいていると急に張りつめてある巣がゆれ始めました。くも吉が上を見ると、なにか白い紙切れのようなものがびくびくと動いて

います。…いったいそれがなんであるか、くも吉にはすぐわかりました。それは一匹のモンシロチョウでした。

「しめしめ。」

くも吉はいそいであみを上つていきました。

くも吉の上つてくる気配を感じたのかモンシロチョウはいっそうはげしくあみをゆさぶりました。

しかしモンシロチョウがゆすればゆするほどあみはかえつてチョウの羽根やか弱い足をねばつこい液でしめつけるばかりです。ーやがてチョウに近づいたくも吉はその

たくましい前足で押さえつけよう
としました。

すると、逃れようとして死にも
のくるいではばたいていたモンシ
口チヨウがびたりと動くのを止め
て言いました。

「くもさん。お願い、私を食べな
いで…」

くも吉はせせら笑うように答え
ました。

「冗談じゃない。そうはいかない
よ、なにしろおいら、けさから何
一つ食べていないんだからな。」

そう言いながらも吉はモンシ
口チヨウの片方の羽根を押さえつ

けました。

モンシ口チヨウはふるえながら
訴えるように言いました。

「くもさん、お願い。私の言うこ
とを聞いて、ほーら東の空からお
月さんが出てきたでしょ。…私ね、
あのお月さんまで行くところなの。」

「えっ？ お月さんへ？ いった
いなにしに行こうっていうの。」

「私、死んだお母さんに会いに行
くの…」

「なに、お母さんだつて？」

くも吉は「お母さん」と聞いた
とたん、まるでエレキにかかった
ようなシヨツクをおぼえました。

「お母さん」：なんとなつかしい言葉であろう。そうだ、ほくにもお母さんがいたんだ。―あれはいつごろだったか、まだぼくがほんの小さな子供の時だったなあ。お母さんはほくたち大勢のきょうだいにやさしく教えてくれたつけ―

「いいかい坊やたち。お母さんが今から巣のかけ方を教えるから、よく見ておぼえるんだよ。」

そう言いながらお母さんは、スルスルつと梅の小枝を上つて行くと、そこでしばらく風の吹いてくるのを待つて、やがて風が吹いてくると、おしりから出てきた糸を

しつかりと足もとの枝に付け、それから後ろ足で枝をけるように、パーツと飛び出して向こうの枝まで糸を張つたんだ。そしてみるみるうちにこうもりがさをひろげたようにきれいな巣をかけたんだつけ…。

モンシロチョウは、クモが自分の右側の羽根を押さえつけたまま、なにもしないでじつとしているのを、どうなることかと不思議そうに見上げていました。するとくも吉もふとわれにかえり、母親に会いに行くと言うモンシロチョウがあわれに思えてきました。

「そうだったのか。ごめんごめん、よしわかった、今すぐあみを外してあげるから、動かないでじっとしているんだよ。」

そう言いながらも吉はモンシロチョウの羽根をいためないようにしずかにからみついた糸を外してやりました。そして、

「さあ早くお母さんに会いに行つていい。」

と大空へ放してやりました。

「くもさんありがとう。…お母さんに会ったら必ず帰ってきて、あなたのえさになってあげるからね。」

そう言いながらチョウは、すでに中空にまで上つて真昼のように明るくかがやいているお月さんへと、羽衣をつけた天女のように、ひらひらと上つて行きました。

少し風が出てきたようです。梅の葉がさらさらとゆれてきました。くも吉はもうすっかりえさのことなど忘れて寝ることにしました。

梅の葉がしげつて重なりあい、いくらか冷たい風が防げそうな場所を見つけ、そこで休むことにしました。しかし頭の中はなくなつたお母さんの思い出が次々と浮かんできてなかなか寝つかれません。

でも空腹と疲れからいつの間にか深い眠りについたようです。

すると、どこかで「くも吉!!

くも吉!!」と呼ぶ声がします。それはまぎれもないお母さんの声でした。「ああ、お母さん!!」と呼んでくも吉は目がさめました。

「なーんだ夢だったのか。」

思わずくも吉の目には涙がいっぱいあふれてきました。

「おかあさん!!」

くも吉は大声をあげて泣き叫びました。

梅の木の下には白いカキツバタが群生していて、どのカキツバタ

もみな花片の戸を閉じて寝ていましたが、ちよつとくも吉の巢の下あたりに生えている大きなカキツバタがその声に驚いて一枚の花の戸を開け、上を見上げてたずねました。

「どうしたのくも吉さん。…こんな夜中に大声をあげて。夢でも見たの?」

「ええ、すみません…」

くも吉の落とした涙がカキツバタのほおにあたりました。

「あら。くも吉さん泣いているの?…わかつた。あなたお母さんの夢でも見たんでしょ。…さあ。

早く下りていらつしやい。今夜は寒いし、私のお部屋で寝るといいわ。」

それはくも吉の生まれた時から今日までの様子をすっかり知りつくしているやさしいカキツバタのおばさんです。―だから、いつもだつたらおばさんからそんな風に言われると、から意地をはって断るはずなのに、今夜のくも吉はなぜかさびしく甘えてみたいような気になり、黙つたままスルスル―と下りてきて、カキツバタのおばさんの部屋の前に立ちました。

「どうしたの、早くお入りなさ

い。」

そう言つておばさんは花の戸をいつぱい開けてくれました。…なんとかおりのいい暖かいお部屋でしよう。くも吉はまるでおとぎの国にでもいるような気がしました。

おばさんは甘い花の蜜をいつぱい飲ませてくれその上、疲れてねむくなつたくも吉を暖かく包んで、花のお部屋をゆりかごのように、静かに右、左と動かしてくれました。―するとくも吉はまたしても恋しいお母さんの面影が浮かんできて涙があふれて来しました。

「おばさんありがとう。ほくやつ

ばり自分の家で寝る。」

そう言つてくも吉はカキツバタの花のお部屋から出ると、先刻寝ていた場所へ戻りました。

と、その時突然くも吉はなにか固い物で体をはさまれました。――



そうです。ツバメのくちばしにくわえられたのです。…ふりほどこうと思えばできないこともないが、彼は、静かに目を閉じました。『お母さんに会える』そんな気がして。

(山梨・西蓮寺住職)

御法語に聴く

御無言めでたく候。ただし無言
ならで申す念仏は功德少なし
とおぼしめされんは悪しく候。

『往生浄土用心』

おおらかに

朝六時過ぎ。仏壇の前に座り、お線香を立てお参りをする。最後の十念の、あと三遍ほどで終わりというその時、玄関から声がする。「ちゃんと火の元、確かめてから出掛けてよ。ガスの元栓しめてね。昨日忘れてたんだから。じゃあ、行つてきまーす」

出勤する母親が、彼女よりも若干遅れて出勤する、おつちよこちよいな私に言っているのだ。さすがに無視するわけにもいかず、

「うん、わかったあ」

同時に、

「お参りしているのをわかっていながら声掛けることないのに……」

内心、何となくイライラの気持ち顔をもたげる私。しかし、彼女の朝も忙しい。電車の時間もあるし、確かに私のお参りが終わるのを待っている余裕はない。と、次の瞬間、ハッと気づかされた。

「あつ、あの御法語は、もしかしたらこういう意味だったのかな？」

冒頭に掲げた一文の意味が、私にははっきりとしたイメージをもつて理解できておらず、以前から「？」がつきまとつていた。

そう言えば、かつて隨身していたお寺での朝勤行の最中、導師を勤める住職が、急用でかかってきた電話に、途中で席を立つことが少なくなかった。当時は、そういう状況になる度に、朝のお勤めぐらいゆつくり出来ればいいのにと、複雑な心境でいたことを思い出した。法然上人は、さらに続けこうおっしゃっている。

「お念仏は金にたとえることが出来る。火で焼けばその色はいよいよ優れ、水に入れてもその輝きが損なわれることはない。それと同じように、お念仏は妄念の起るときに称えても、何か他のことを申しながら称えてもけがれることはない。(中略) 称えている最中

に、ふと他のことを口にしてしまっても、『今称えた念仏は空念仏^{から}になっちゃった』などとは決して考えてはならない。どのように称えても往生の業であることにかわりはないのである』と。

お念仏の最中に他のことを口にすることなどあるのかと思うのが、我々の普通の考えだろう。むしろ「お念仏を称えるときにはこうでなければいけない、ああしなきゃいけない」といった、[”]制約[”]じみたものを自身に課してしまいがちである。もちろん、わざわざ他のことを考えたり口にしなから称えようとするのはよくないだろう。でも、課した、[”]制約[”]のために、お念仏は本当に易行なのだろうか？ 疑問を抱いてしまうことにもなりかねない。これまた人情として普通だと思う。

しかし、法然上人のお念仏は、[”]普通[”]ではなかった。どうやら、

そんなちっぼけなモノではないようだ。私には他宗の行かどのよう
なものであるか詳らかにはわからない。が、一体、これほどおおら
かな行がお念仏をおいて他にあるだろうか？

母親が出掛けた後、声を掛けられたぐらいでイライラする必要な
ど全くないということ、そして上人が繰り返し説かれた最易、最勝
のお念仏の意味をあらためて知らされた思いがし、微笑んだ次第で
ある。

（浄土宗総合研究所研究員・太田正孝）

表紙は語る

野草花ごよみ

7月

・
バアソブ

(キキョウ科)

山野にはえる多年性のつる草。この奇妙な名の由来は牧野植物図鑑によると木曾地方でそばかすのことをそぶとすることによるものだそうである。すなわち、ばあさんのそばかす(失礼)。花の内側に斑点がある。同じ属でバアソブより少し大きいツルニンジンには別名をジイソブという。

撮影場所 埼玉県浦和市



もうひと花

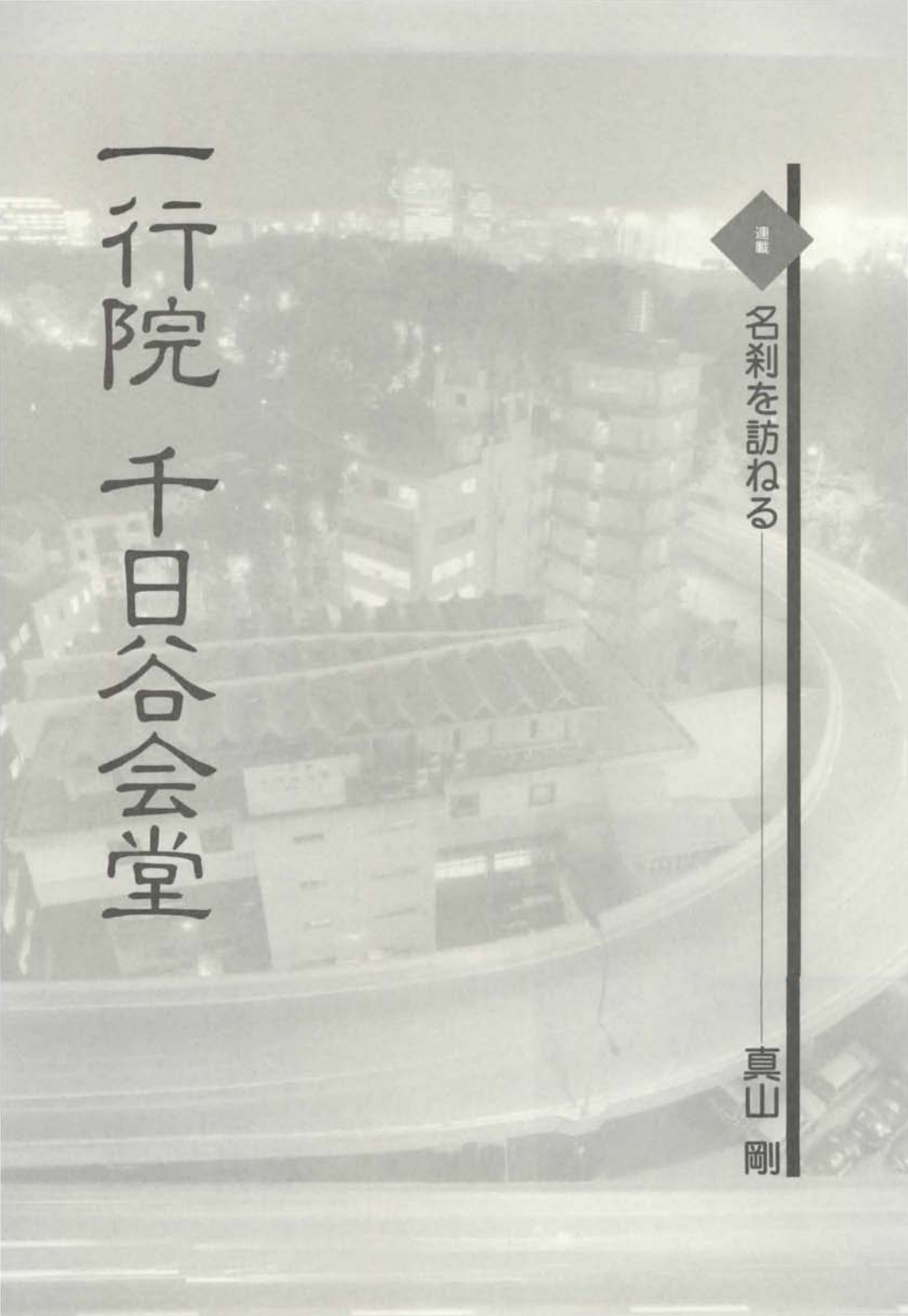
ギンリュウソウ (イチヤクソウ科)

銀竜草。いわゆる腐生植物で、葉緑素を持たず、高等植物のくせにきのこのような生活をする。山の木陰にはえる。ユウレイタケの別名がある。

撮影場所 東京都高尾山

表紙Photo/Report

石井敏之



連載

名刹を訪ねる

真山剛

一行院 千日谷会堂

人生の中の大きな買い物といえば、家にクルマに墓。われわれ庶民にとってはこの三つはとても高価な買い物で、よくローンを組む。家のローンにいたっては親子二代で支払うこともある。その点、クルマや墓は親子二代とまではいかないが、いざ買いたいと思ってもそう簡単には手が出せない。贅沢品としてクルマを買う時は、どのクルマがいいか迷いに迷う。まあ、この迷っている時が楽しいといえは楽しいのだが、気軽に買えるものではない。

しかし、墓となるとまた違ってくる。すでにお墓をもっている人は知らないかもしれないが、お寺の墓を買う時にはまず永代使用料を払う。そう、使用する権利を末代にわたって所有するための費用だ。そして何より自分がいずれは入るところだけに、いやがおうでも慎重になる。

東京を中心とする首都圏ではここ数年お墓不足がいわれて久しい。しかし、実際は不足してないという。バブル最盛期でも高くてよければ都心の一等地に一戸建てを持つことができたし、億ションも買えた。墓も同じで、便利な場所であつて安いの墓を求めるとなかなか見つけない。ただ、お寺の墓は宗旨宗派といった問題や、住職との相性などもあるからちよつと面倒なこともある。だから安くて立地の良い

塔の一階の法要スペースには観音さまが祀られている



公営の墓地に人気が集まり、抽選という競争にまぎてなるのだろう。

今回は昭和三十九年にロッカー式の墓を立てた東京の真ん中にあるお寺を紹介する。

東京信濃町の一行院は首都高速四号線の下り外苑出口のすぐわきにある。高速を走りながらも「千日谷会堂」という看板が見えるが、この高速わきの看板の建物が一行院の本堂で、そのシンボルともいえる塔は、高速道路を見下ろすように聳え立っている。地下二階、地上八階のその塔は地下二階の機械室と法事スペースと休憩場所となる一階を除けば、あとはすべてロッカー式の墓である。

地方では考えられないだろうが、東京近郊にはいろいろなお墓がある。ロッカー式の墓や、ちよつと小型だが本物の墓石を室内に並べた墓、お骨に向かって供養するドーム型の墓、お参りするお骨を棚からベルトコンベアで運ぶ墓、書きながら驚くぐらいだから、すでに普通のお墓を持っている読者には目を回す人もいるだろう。

こう並べると今ではめずらしくないロッカー式のお墓だが、一行院のロッカー式の墓は、今をさること三十二年前に作られたのである。現在のように葬儀屋や墓石業者と協力して墓を作る時代ではなかっただけに、その決断力と先見性は並大抵ではない。

一行院の正式名称は永固山一行院千日寺。徳川家康に重用された

永井直勝が自分の部下で僧侶になった来譽故念のために、慶長（一五九六―一六一四）の末ごろに建立した寺で、赤坂浄土寺の末寺ということになっている。この成立については一行院が塔や本堂を建立した昭和三十九年に一行院再建記念で出版された鈴木（現・玉山）成元著『永井直勝』の第四章「一行院の成立と変遷」に詳しい。それによると、永井家の持仏堂であった小さな庵室が、永井直勝の死後、その菩提を弔うために本堂に建て変わり、直勝の回向のために千日を単位とする万日回向の常念仏が行なわれるようになった。常念仏の目標は万日だが千日単位で区切られ、そこから千日寺の名がつけられたとある。いまでも塔の前に二万日の念仏の石碑が残っているが、一口に二万日というが、計算するとなんと五十五年近い年月に及ぶ。まさに念仏道場である。

念仏の絶える日はない一行院も、寺として随分とお金に苦労した様子が書かれている。一行院は直勝からもらった二〇二五坪のほかに檀家だけで、他寺のように抱屋敷や抱地、預り地などはないうえに、立地条件や念仏道場ということもあってか、古くなって傷んだ本堂の修復に、鐘を処分したり借金をするなど大変な時代が長かったようだ。

こうした中、明治四十四年、浅草の得生院から第三十世となる八

改葬時に出てきた出土品の数々



百谷順応がやってきた。当時、幽霊屋敷同様の荒れ寺を再建するため、順応は自分のものまで売り尽くしたという。この順応は大正五年に芝の天眼院に移り、再び昭和五年に第三十二世として一行院に戻ってくる。そして昭和九年に隠居するが昭和二十七年に往生するまで、一行院の復興に力を注いだ。なかでも大正十年に一行院に創設した「仏教文化伝道協会」で児童教化を志し、また造詣の深い音楽・舞踏・演劇を活かし、法事にオルガンを使ったり、「礼讃舞」というお経にあわせた踊りを創作し、大本山増上寺で発表、ハワイにまで普及させたという。また住職を継ぐことになるの孝保に嫁いだ娘、信子を、日本国中連れ回し伝道していたという。そしてこの順応の進歩的な行動は第三十三世の孝保へと引き継がれる。

『永井直勝』は一行院建立を発願した永井直勝の一代記と一行院の歴史を記しているが、高速道路が一行院境内を通ることになり、新本堂が昭和三十九年十一月に完成する予定、という記述で終わる。だがこの昭和三十九年こそ、順応の遺志をついだ孝保の進取の精神が形となった時であった。

昭和三十四年八月十八日、建設省告示第一五三三号で首都高速が一行院境内を一部通過することが発表された。決して多いとは言えないものの檀家を抱えた一行院にとっては墓地改葬を含む再建は簡

単なことではない。明治時代にやはり鉄道用地（当時私鉄、現JR中央線）の敷地として境内を買上げられたことがあるが、今度の高速道路は大きく境内を横切り、その比ではない。孝保はすぐさま責任役員会や総代会を開き説明をした。一年に及ぶ住職の説明に檀家は賛成し、昭和三十六年には全檀信徒が境内地の割譲に同意した。しかし新本堂建設にあたり、境内を貸していた一軒との移転交渉は一筋縄ではなかったという。それはともかく、一行院にとって大きな変革の時がきた。

東京オリンピックに向けての経済発展、日本の首都東京は大きく変貌しつつある中で、墓地改葬を決意し決断したのが、墓の塔、ロッカー式のお墓である。当時はまだ墓といえば野墓地、つまり地面の墓が当たり前の時代だ。それを幅一メートルに満たないロッカーにお骨を納める形にしたのである。しかも宗旨宗派どころか宗教も問わなかった。いまでも十字架がロッカーの〇〇家の上に書かれている墓があるし、神道の家の墓もある。そして一行院の歴代住職の墓さえ檀家と同じロッカー式である。いまはやりのロッカー式よりもシンプルで骨壺をたくさん収容できるがそれでも収容できなくなる、今度は地下にある合同ロッカーにお骨を移すという。また最上階にある阿弥陀さまを祀る法要スペースの左右には普通のコインロ



ツカーを黒くぬったお骨入れがある。片側四十五づつのロッカーはお墓がない方のための一時預かりロッカーだという。

こうした当時としては、いや現在でも斬新な発想の墓は、多くのお寺の見学を受けたという。まさに新しい墓の形態の先駆者である。こうした新しい墓に抵抗がなかった檀家ばかりではなかったそうで、数件の檀家は公営の霊園に墓を移したというが、いまでも変わらず一行院の檀家である。

塔から出てきた時にお墓参りの檀家さんに会った。嫁いだ先のご主人のお父さんが当時から檀家で、いまはここに眠っている、というそのご婦人はこう言った。

「それは確かに最初は抵抗がありました。実家のお墓は普通のお墓でしたからね。でも慣れれば、場所が便利ですぐにお参りできますから、何の問題もありませんよ」

孝保の先見性はこれだけではない。一行院の本堂は四階建てだが、最上階が本堂で、三階が客殿と事務室、二階一階が庫裏（お寺の家族が住む場所）なのだが、信濃町の駅から一分もかからない入り口になる三階と四階が広くできている。そして本堂は斎場としてよく新聞にその名が載る。お気づきの方もいるかもしれないが、有名人などの葬儀をこの一行院の本堂、別名、千日谷会堂はよく行う。平

成三年から葬儀を行った著名人をあげると、松山英太郎、上原謙、大杉勝男、ハナ肇、逸見政孝、乙羽信子、高橋悦史といった方たちだ。もちろん斎場のために本堂をつくったわけではない。孝保の先代、順応が昔の本堂を小山内薫をはじめいくつかの劇団の練習場に提供していたこともあり、孝保自身も友人と始めた千日谷レコードコンサートや、落語、新劇といった会場として一般に公開するために使い勝手の良い本堂にしたものだ。それがいまでは自宅で葬儀を行わなくなった都会人の役にたっているのである。

「寺として何かできること」、孝保の二行院再興の理念だったが、この理念は浄土宗の法式（ほっしきと読み、お経のあげ方や立ち居振る舞いのこと）の大家としての孝保が、新本堂の建立記念に作った経本にも現れている。

『昭和新訂浄土礼誦法』がそれだが、菩提寺の住職に聞いてみたら、とてもよく使われている経本で、最近では京都など関西でも使うことがあるという。よくよく聞いてみると、関東と関西ではお経の読み方が少し違っていて、浄土宗の公的な出版物の多くはこの本のような形態では出しにくいそうだ。それだけに出版当時はいろいろな意見が出たのも事実らしい。しかし、何事も先駆者たるには多くの障害があるのは世の常だ。非難や中傷を気にしていたら何もできない。

一行院・千日谷会堂の看板は高速のすべわきに
かかっている



この『昭和新聞浄土礼誦法』のあとがきに孝保はこう書いている。
「(前略)開山以来の仙境に一大改革の手を加えざるを得なくなった
ことはまことに遺憾のきわみである。しかしながら(中略)これを
契機として現代に生きる堂宇を再建し、都民に対する教化の道場た
らしめることこそ(後略)」

最後に、つねづねロッカー式の墓で疑問に思うことを聞いてみた。
それは建物が老朽化したときにどうするのか、という疑問だ。

現住職の靖匡住職は答える。「先代も言っていましたか、そのとき
の住職が檀家さんと相談し、どうするかを決めればいいのです」

なるほど明日を憂うよりも、今日を生きたことが先決だ。一行院
第三十四世靖匡住職は海外で飛行機事故などがあり、日本人の犠牲
者が出ると現地に赴き事後処理をし、お経をあげる有名な僧侶だ。

この『浄土』でも以前に記事になっている。

進取の精神を眠らせない何かがこの一行院、千日谷会堂にはある
のかもしれない。歴史と伝統を守るのもお寺だが時代の先駆者たる
ことも大切なことなのだ。

(ルポライター)

皆さんが「恥ずかしい」と感じるのとはどんなことですか？

同級生よりも自分の出世が遅れていること？ それとも自分の乗っている車が友達の車よりも見劣りすること？

昔から「恥を知る」というのは、ある意味で美德ともされています。もちろん、どう見ても恥ずかしいと言える行いというのはありますから、そうしたいとは思ってもその欲求を押さえるのは大事なことです。ここが動物と理性をそなえた人間の大きな違いの一つとも言えるでしょう。しかし重要なのは何を恥ずかしむべきか、ということの事です。自分の地位や車が他人のそれよりも劣る、といったことが果たして本当に恥じるべ

若和尚の

十六其はしいとツヨチ

きことかどうか？ もっと真正面から見つめて恥ずかしいと感じ、改めるべきことがあるはずではないでしょうか？

日常のあらゆる面において他人との画一化が推し進められている感のまだ強い昨今。そういった風潮がイコール平等であるという大きな誤解を招いておりひいては没個性化を生み、その人の能力までをも押し殺してしまふことにつながっています。

お釈迦さまの言葉に「恥じる必要のないことを恥じ、恥じるべきことを恥と思わない、よこしまな思いをもつ人は地獄に行く」(法句経)というのがあります。もっとも、何にしても恥じることによって向上心を奮い立たせるということがあります

から、それはそれで大きな意義があるでしょう。でも、所詮、隣の芝生は青く見えがちなのです。些細なことに惑わされて他人とつまらない比較をし、人として大切なもの、自分らしさを置き忘れたくはありません。「ボロは着てても心は錦」の方が、どれほどすがすがしく日々を送れることか。

うわべだけのことや物質的なことは何の恥でもありません。それが本当に恥じるべきことかどうかわからなくなったら「仏さまはどうお思いになるだろうか」と、仏さまのお気持ちを鏡にして自分を映してみても良いでしょう。きつと気づかせて下さるはずですよ。

(正)

FRANCE

外国で
生活して
⑫

さまざまな 文化の中で 生きる

高僧光隆





子供のころ、「外で遊んでいらつしやい」という親の言葉を聞かないで、大人のいるところから離れずに、子供と違う大人の態度、しぐさのおもしろさや、あまりよくわからなくとも、自分の知らないことを話していることを聞きたいという、そんな好奇心で、大人の話を聞いていた。そんな思い出があります。

自分の知らない世界のことがたくさん書かれた本を、学校の図書館で借りてきては夢中になって読んだ思い出。

また実際に外に出ても家の中にいても、また雨の日でも晴れの日でも、毎日何か新しいこと、知らないこと、わからないことがみつき、世界が限りなく広がってゆくように感じて、自分の持っている小さな、わずかばかりの知識や心が躍動し、まさに自然の中で、泥んこになってもまれながら広い世界に育まれていた、そんな毎日でした。

大学を卒業してまだ何年もたっていない頃、私はインドへ旅行する機会を得ました。そし

てこの旅行が私にとって、その後の人生を大転換させるほどの大きなインパクトを与えてくれる旅となりました。

それまで知識の上では、世界に多様な文化や、歴史観があることは知っていましたが、それが自分にとって、いかなる働きを持つものかはわかりませんでした。実際にそのインドの広大な土地、風土、偉大な歴史と文化、生活習慣の異なる人々を目の当たりにして、自分の頭の中で、どこかに詰まっていた血が、堰を切って一気に音を立てて流れ出したような痛烈な感覚にみまわれ、多くのことを驚きを持って感じ、考えさせられました。

自分が変わってゆくように感じた動機のひとつに、世界の各大陸、国々、各地域、各民族、各人種を理解するときに、それぞれの歴史、文化、現在の欧米先進国を（文化歴史観を）中心とした考え方を取り除いて、それぞれの関連性のあるローカルなものとして観てみようと思ったことです。そしてそう考えたとき

に、とても気持ちが楽になったような気がしました。

そうしますと日本も、それまでと違った角度で接することができ、見られるようになりました。

それから、一九八四年に私は世界の美術館を見て回ろうと思い、一年近くヨーロッパ各国を旅行しました。

ほとんどユースホステルを宿にしました。

ユースホステルはまさに人種の入り交じっているところで、飛びかう言語もさまざま、行動、態度、様子もいろいろの人が、皆初対面でお会いするところなのです。

そんな中で、旅行を始めて二か月ほどたった頃、私も少しは旅慣れてきた頃のことです。オランダはアムステルダム、ユースホステルで、夕方顔見知りになった男女六人で、外で食事をとろうということになり、私も誘われて我々のレベルで好みに合うレストランを見つけ、皆テーブルにつきました。それぞれが

飲み物と食べるものを注文し終ったところで、中の一人が

「みんなの共通の言葉は何だろう」

という質問をしました。それから

「君は何語を話すんだ？」

「君はいくつの言葉を話せるのか？」

と一人一人訪ねました。残念ながら一同の共通する言葉はひとつもありませんでした。そこで質問を発した彼は、

「OK、ということは、英語とスペイン語のどっちかな、僕は二つとも話せるからまかせろ」

ということになり、みんなで会話が始まりました。ちなみに出てきた言葉は、英語、スペイン語、エジプトの言葉、ドイツ語、フランス語、日本語でした。三か国語以上話せる者も二、三人いたように覚えています。それぞれローカルな者同志が、一つのところで偶然に会い、共通の言葉を探し、それぞれの思うことを話し、楽しく食事をしました。このよ

うなこと『みんなの共通の言葉は何だ』という合言葉は、それ以降の旅行中もしばしばありました。ひとつの言葉だけで会話が成立することに何の不思議さも覚えず、当たり前として育ってきた私にとっては、このような会話、コミニケーションを前にして、皆人間は同じ言葉、生活習慣、考え方を持っている者ではないという認識を持って接する方法をみて、最初インドで感じ考えたことにひとつ肉がついたような思いがしました。

私も『パンダの親指』^(註)ではありませんが、ぎくしゃくしながらも自分のもっている能力、使える者は何でも用い、間に合わせながらつとめました。

絵は触れるもの

ドイツでスペイン人と絵を見ていたときのことです。その人が絵に触ろうとするので、「触ってはいけないよ」

と言うと、彼は、「スペインでは絵は触れるものだ」と言うのです。そして絵の近くに寄ったところ、美術館の係の人から注意を受けてしまいました。彼はブツブツ文句を言っていました。私はそのとき、まったく彼の言う「絵は触れるもの」という意味がわかりませんでした。それにどうして絵に触れていいのかも問いませんでした。

数か月後スペインに寄りマドリッドのブラド美術館で、有名な十五、六世紀の画家の手による『ヒエタ』（十字架より降ろされたキリストを、マリア聖母が悲しくその生命のただえたキリストを膝の上にのせて抱いているところの絵）を見ているときのことでした。絵の前に数人の人がいましたが、その中の一人がスーッと絵の前に近づき、自分の胸に十字をきり、描かれているキリストのだらりとした手の甲を、少し膝を曲げてサツと指で触れてゆくのです。

ハツとする思いがしました。その後その絵の手の甲のところを見ると、そこどころだけ絵の具がはげていました。一体どの位前から毎日、何人の人がそれに触れてゆくのでしょうか。それでも絵の前には柵は設置してありませんし、係の人の注意も、監視もありませんでした。「絵は触れていいもの」という意味がこれでしょうやくわかりました。

一九八六年以来、私はフランスのパリに住むようになりました。パリはさまざまな国籍の人、民族、人種の入り交じっているところですよ。フランス語はもちろん、さまざまな言葉が耳に入ってきます。

パリについて、私が美術学校エコール・デ・ボザールに聴講生として受け入れてもらったときのことです。自分が求める教師の登校の日を調べ、見計らってその教師の教室（アトリエ）に行き、ここで勉強させてほしいと願いました。先生は、

「あなたの作品を見せなさい、どんなことが

やりたいのだ」

とおっしゃり、少し質問を受けましたが、すぐに「OK」と言って下さいました。

まったくこの開放的なシステムには驚きました。運が良かったのかもしれませんが、先生は分け隔てなく私の作品を見て、適切な指示を下さいました。深く感謝しております。ちなみにその先生はチェコスロバキヤの人でした。

ところで、先生との出会いではこんなことがありました。

あるとき、面接のことで少し行き違いがあり、私は二人の教師にそれぞれのアトリエで自分の同じ作品を見せることになりました。

一人の教師は、

「こんなアカデミックなおもしろくない作品」

と言い、他のもう一人の教師は

「このまま続けなさい、あなたは多くのことを学ぶでしょう。OK」



と言って下さいました。もちろん私が最初から選んで入りたかった教室は後者の先生のところですよ。

他のヨーロッパの国々もそうでしたが、文化に対する開放的なシステムにはまったく驚くものがあります。フランスは世界でもっとも多くの外国人学生を受け入れている国のひとつです。また世界のさまざまな問題に対する討論、会議が大小実に多く、活発に行われていることに気づかされます。国籍の異なる種々の人種、民族、異なる言語、歴史、文化を持つ人々による、討論、対話がいつも学内や、街中で見られるのです。

またあるとき、イスラム教の人と神について話すことができました。彼の語るイスラム教の話の中に、仏教の説話ととても良く似たものがあり、興味深く感じました。結局二人の間に神について一致した話にはなりませんでした。その会話に何か新鮮なもの、自分が今までではつきり問いかけたことがないもの

が発見できたような感じを味わいました。

彼はフランス語、英語、アラブの言葉を話し、英語は彼が過ごしたアメリカでの少年時代を思い出させるそうです。

そういえば、私の知っている日本人夫婦のこちらで生まれた青年（二十歳）にとって、日本語は、お父さん、お母さんの言葉という意味を持つてはじまるそうです。また、お父さんがこちらの人、お母さんが日本人である青年は、私に「日本語を話すと、日本語を通してものを見るような気がし、フランス語を話すときは少し違う感じになる」と言っておりました。

日本で良く耳にした言葉を、こちらに来て生活習慣からの違いで聞かなくなると、忘れてしまうということも含めて、良い意味でも悪い意味でもそれからの開放があります。逆にこちらの言葉による束縛も生まれてきます。言葉は、私たちに対して、目に見えない形で作用する、とても大きな力をもっているもの

とつくづく感じています。

アフリカのガーナ出身の人と

私があるとき、アフリカのガーナ出身の人に、

「自分はフランス人とは違うし、かといってこうして長い間フランス、外国に住んでいると、自分が日本人でなくなってくるような気がする、不安なのだ」と言うと、彼は、

「おいおいコースー、それじゃ私はどうなるのだ。僕はアフリカのガーナ生まれだけど、教育のほとんどは英国、そして今フランスに住んでいる。そしてもうひとつ、まったくのアフリカンではないのだよ」と言うのです。そして彼はアフリカの風土、文化から見た現代のヨーロッパ社会の批判を語り始め、

「僕はアフリカ生まれだが、イギリス人でも

ないし、フランス人でもない。僕はアフリカ人の目で社会を見、考えたいのだ」と言っておりました。

フランス女性のカラテの先生

ある日私の住む隣の街で、地域の人々のためにいろいろなスポーツを紹介する催しがありました。サッカー、ハンドボール、ダンス等に混じってアジアの武術もいくつか紹介され、日本の空手もありました。

先生は四十歳ぐらいのフランス女性でした。大人から子供までの約三十〜四十人ぐらいの生徒が、あるときは全員で、あるときは二人で、またあるときは五、六人で、先生の指示のもと空手の紹介をしました。そして先生個人による型も披露されました。その先生の一举一動は、まるで日本人の古式そのものでした。実に私が反省させられるようなアジア的、日本的な美しさがありました。終わってから

私はその女性空手家のところへ行き、あなたは日本に長く住んでいたのですかと訪ねました。

「いいえ、一度も行ったことはありません。年に二度、日本から先生がこちらに指導に来ます。それを学んでいます」

とおっしゃったのです。アンドレ・マルローの「セザンヌの絵のスタイルが何年もしないうちに、日本の地方にまで伝わり、そのスタイルで絵が描かれる」「空想美術館」という言葉を思い出しました。

私は今、異文化と感じられる風土の中に住んでいます。そしてその中にまた私と同じように、この国の生活習慣と異なった人々が混在、共存しています。時に、自分の国籍、人種、民族といったものをいったんぬぐい切ったら、いったい何が残るでしょうか。自分の土台といったものは何でしょうか。またその土台はあるものではなく作ってゆくものでし

~~~~~

ようか。などと考えています。

多様なものの共存混在のなかにおけるいろいろなものの接触、さまざまな対話、問いかけ、そしてそれによって練り上げられてゆくところの対話、問いかけの大切さを感じております。

世界の中で今の私は、まるで泥んこまみれの子供みたいなものです。子供の時との違いは、その泥んこまみれが子供にとってはおもしろくない域である自己の責任にかかわるということです。

これを書き、テレビのスイッチを入れました。画面にアジアの水田風景が映っています。水平な水と地の面を持つ水田の何とも言えない美しさ、そこで働く人々の姿。その風景には麦畑のもつ美しさとは、また違ったものが感じられるのです。

(注)『パンダの親指』

進化論学者ステイブン・ジェイ・グールド博士の著書で、パンダの親指は、本当は指

ではなく、橈側種子骨(とうそくしゆしこつ)という手首の小さな骨が、大きくなって親指のもつ機能を務めることができるようになったという話。

高僧光隆(こうそうみつたか)

一九五〇年生まれ。石川県七尾市西光寺出身大正大学卒。浄土宗教師。

現在、フランスパリ南西四〇kmの郊外に住む。現在、画業を営むほか、ガイド、在留邦人の葬儀式等を執り行っている。



「彼は彼女を得て有頂天だね」  
などと私達は使います。つまり  
得意の絶頂にいる状態を称し  
「有頂天」と言っています。

この言葉も実は仏教語の一つ  
で、言葉を分解すると、「有の  
頂天」ということになるでしょ  
う。ここでいう「有」とは、存  
在すること、存在する領域等の  
意味です。つまり、いのちある  
ものの世界の最上の世界である  
天の世界の、最も頂きが「有頂  
天」ということです。古代のイ  
ンド人は、世界を六つに分け、

その最上にあるのがここであ  
う天で、その下が人間、その下が  
阿修羅・畜生・餓鬼ときて、最  
も下に地獄の世界があるとい  
うのです。

いきものはこの六つの世界の  
いずれかに属していて、この六  
道の世界から超え出ないかぎり  
死ねばまたどこかに生まれかわ  
り、この生存のくりかえしはと  
どまることがないと考えていた  
のです。これがいわゆる輪廻の  
考え方で、たとえ天としても生  
まれても安心はできず、次は地

## 日常仏教語

### 有頂天

獄に落ちるかもしれないという  
恐怖が常につきまといてい  
うのです。

こう考えると現在の使い方も  
妥当なところでしょう。有頂天  
の状態はそうは長く続くもので  
はなく、次に来るのはよくて天、  
悪ければ地獄にも落ちようとい  
うのです。そしてその今より悪  
くなる可能性が五対一というの  
ですから、ずいぶん分の悪い話  
です。有頂天になったときこそ、  
心をひきしめる必要があります  
です。

(K)

薫香  
線香  
經典  
念珠

浄土宗総本山知恩院御用達  
**豊田愛山堂老舗**

※地方発送受賜ります。

京都・祇園

TEL(075)551-2221番代  
FAX(075)525-1806番

お盆の

二つの

謎

大正大学教授

藤井正雄

お盆についてよく聞かれることは、まず第一に、お盆のお話しのなかで、目連尊者のお母さんは登場しますが、登場してこないお父さんはどうなっているのでしょうかという質問です。次によく聞かれるのは、お盆のお供えに、キュウリの馬と、ナスの牛がのりますが、どっちがお迎えて、どっちがお送りですかという質問です。

## 目連のお父さんはバラモンで 天に生れていた

お盆の由来は、西晋の竺法護訳の『仏教盂蘭盆經』によりますと、次のようにモチーフ別に整理することができます。

- ① この頃、目連尊者は神通力を得ています。
- ② 父母の恩に報いようと思い、神通力をもって世の中のありさまをみつめます。
- ③ 亡ったわが母が餓鬼道に堕ちているのを見ます。全身骨と皮になってやせ衰えて、みるからに哀れな姿になっていたのです。
- ④ 驚き悲しんだ目連尊者は、すぐに神通力

でご飯を鉢に盛って供養しました。

- ⑤ 母は喜んで食べようとしましたが、ご飯はたちまち火炎となって食べることができません。

⑥ 目連尊者は大声で泣き悲しみ、救いをお釈迦さまに求めました。お釈迦さまは、静かに説かれました。

「目連よ、汝の母の犯した罪はあまりにも深く、それに比べて汝の修業の日が浅いので、一人の力ではなんともすることができない。しかし、幸いにも七月十五日の〈僧自恣〉の日が間近い。その日は雨期にあたって、たくさんのお僧が一堂に集まり、それぞれが過去を反省懺悔して、さらに仏道の修業にいそしむとする、またの名を〈仏歡喜の日〉ともいってめでたい日である。この日にたくさんのお馳走を諸仏集僧にお供えして、生みの父母、七世の父母のために苦を抜き、樂を与えてくださるよう回向をたのみなさい。たくさんのお僧が心から唱える回向の功德は広大無限であるから、現在世にある父母は百歳の寿命を保

ち、今は亡き七世の父母は餓鬼道から救われるであります」

懇切に亡母の苦しみを除く作法をお釈迦さまは目連尊者にお示しになりました。

⑦ 孟蘭盆会が営まれます。

⑧ 亡母はその功德によって餓鬼の苦しみより離れ救われます。

⑨ お釈迦さまは、未来においても孝順のために孟蘭盆の供養をささげれば現在の生みの父母、過去七世の父母にその功德は及ぶと教えられます。そして、毎年七月十五日には孟蘭盆会を営むことをすすめます。

⑩ その場に集うお釈迦さまの弟子たちはその教えを聞いて心から喜び、その教えを実践に移したのでした。

以上のように『仏説孟蘭盆経』の全体を一貫して流れているのは父母への孝順で、説供↓抜苦↓報恩をモチーフとしていることが分かります。

ここで、お経のなかに登場する目連尊者がいかにしてお釈迦さまのお弟子になるかの物

語を再現してみましょう。

いうまでもなくお釈迦さまには、たくさんのお弟子さんがありました。そのなかでも特にすぐれたお弟子さんを十大弟子といいます。目連尊者はそのうちの一人でした。いながらにして世界のできごとを見たり、聞いたり、他人の心を見通すことのできる神通力をもっていましたので、神通第一と称えられた方です。

目連尊者は、お釈迦さまが主に仏法を弘められるために活躍されたマガダ国の首都ラージャグリハ（王舎城）の近く、クリタという村の富裕なバラモンの子として生まれました。一人息子でもありましたので、両親の寵愛を一身にうけて育ちました。幼少の頃から聡明で、ひとり林のなかで考えることの好きな、物静かな子供でした。

隣村の舍利弗とは無二の親友で、あるとき、二人は相携えて出家し、当時の有名な修業者の一人であったサンジャヤの弟子となりました。舍利弗はのちに十大弟子の一人となり、

智慧第一と称された人です。まもなく二人は二百五十人の弟子をもつまでになりましたが、コーサラ国の首都シユラーヴァステイー（舍衛城）の近くでお釈迦さまの弟子の一人が托鉢する姿に出会いました。出会った僧のあまりにも気高い姿に驚いた二人は、すぐに二百五十人の弟子とともに、お釈迦さまのもとに行き、弟子となったのです。

このように、お釈迦さまの弟子になったばかりの目連尊者の話が『仏説孟蘭盆経』に語られているわけです。

目連尊者の亡き父は、前に述べましたように、バラモンの修道のおかげで天上界に生まれたのに、亡き母はなぜ餓鬼道に堕ちたのでしょうか。業つく婆（ば）というのに、なぜ業つく爺（ぢい）とはあまりいわないのでしょうか。それはど父に比べて母は業が深いのでしょうか。

母の業が深いというのは、欲ばりという意味ではないのです。母はわが子を育てるのに、時には心を鬼にして育てます。育児に専念する尊い母親の姿を見落としてはならないでし

よう。それに気づかずに、母を忘れ、供養することのなかった目連尊者、お釈迦さまはそれとなく教訓を垂れたものと受け取ることができます。

『孟蘭盆経』は亡き母への恩を「乳哺の恩」、いいかえますと乳を飲ませ育ててくださった恩という形で表現しているのです。

## どちらが送り迎えかは心のもち方に

では、次の質問について考えてみましょう。お盆のお供えもののなかに、東北地方から関東・中部地方にかけて、茄子や胡瓜で牛馬をつくって盆棚に供える風習があります。たとえば三河地方では茄子のへたを頭にして、小豆で目、南天の葉で耳、四本の芋殻で足をつくります。東北地方では麦わらでつくるのが一般的で、福島の一部では瓜でつくるころもあります。

同様に二匹とも馬とする地方、牛と馬とする地方などヴァリエーションがあります。そ

して一方に精霊が乗り、一方は荷物を乗せるのだといひます。また馬が迎え馬、牛は送り牛とする地方もあります。そして一方に精霊が乗り、一方は荷物を乗せるのだともいひます。また馬が迎え馬、牛は送り牛とする地方もあります。精霊を一刻でも早くお迎えする気持で迎えは馬、ゆつくりと帰つてもらふ氣持で送りは牛と解釈する人が多いようです。ところが、逆に迎えは牛、送りは馬と解釈する人も多ひのです。それは、お盆の期間をどうとらえるかによつて違つてくるのです。

お盆は現在でこそ十三日を盆の入りとし、十五日ないし十六日を送りとしていますか、もとは旧曆七月を盆月といつて一カ月もの長期にわたるものであつたのです。中国では七月一日を開鬼門といつて地獄の門が開き、七月三十日を関鬼門といつて地獄の門が閉まるといひ、この一月の間は孤魂、幽鬼がさまようと言われていました。恐らくこの中国的世界觀の影響があつたのでしよう。

長期間にわたる盆月の遺風は今日でも各地

に残っています。旧盆は旧曆七月十五日の満月の日を中心に一日、七日の日を刻んで民俗行事が営まれてきました。七月一日を盆の開始とする地方は全国的にみられます。七月一日を地獄の釜の蓋があく日というのは、鳥根県鳥根町でもいいますが、主として関東、中部地方に伝承されています。その呼称も、千葉県下ですら、たとえば印旛郡栄町竜角寺では「釜蓋朔日」、佐倉市内田や木更津市牛込では「カマノフタノ朔日」といひ、安房郡天津小湊町字清澄では「釜フタノ祝イ」といひます。また埼玉県では比企郡都幾川村大字大野、秩父市品沢、浦山、秩父郡大滝村滝之沢では「カマノ口アケ」というよび名もみられます。

七月一日を盆のはじめとするよりも、もっと早く盆をはじめとするころもあります。紀州のケバナ（夏花）は、四月八日に卯の花をお釈迦さまに供えるといひ、盆の七月十三日まで毎日新しい花ととりかえ続けるとされています。また泉州南部でもタカバナをあげ

るのは、この卯月八日の地獄の釜のあく日と伝承しているといえます。

七日盆は墓の掃除をするというのは全国的で、墓掃除のほかに仏具みがき、盆棚づくりがなされています。七日盆のあと十二日には草市がたち、十三日は迎え盆、十五日ないし十六日を送り盆とするのが一般的な風習です。しかし、東北地方では十九日か二十日を送り盆とする地方も少なくないのです。また、奈良県や鳥取県など、三十一日の八朔はつきの宵や八朔に盆踊り納めをして精霊を送るとするところもあります。

このように、長い期間にわたる盆月の七月一日に精霊が地獄の釜の蓋があいて来るのだから迎えは牛、あまり長く滞在しては迷惑と送りは早く馬と考える解釈もあるのです。

お盆はこのように民俗の上からみますと、先祖の霊に対する人間の複雑な心情が反映されていて興味深いものがあります。かつては正月と初秋望月の一年を二分する季節の折目目に先祖の魂祭りが早くから行われていたこ

とは確かなようです。現在の盆行事は初秋の魂祭りの行事が仏教の盂蘭盆会の行事と習合することによって国民行事にまで結晶したものとみてよいと思います。

## お盆の意味を 深くかみしめよう

お盆はふだんの日常生活と打って変わって、生者の世界に一時的に死者の霊を迎えて生者と死者の共存する小宇宙を構成するときです。そこにこそ生者と死者となった先祖の霊との交歓のドラマがさまざまな習俗となつて織りなされているのだといえます。もともと日本人は、この世とあの世とを連想的に同じ生活空間のなかにとらえてきたといえます。

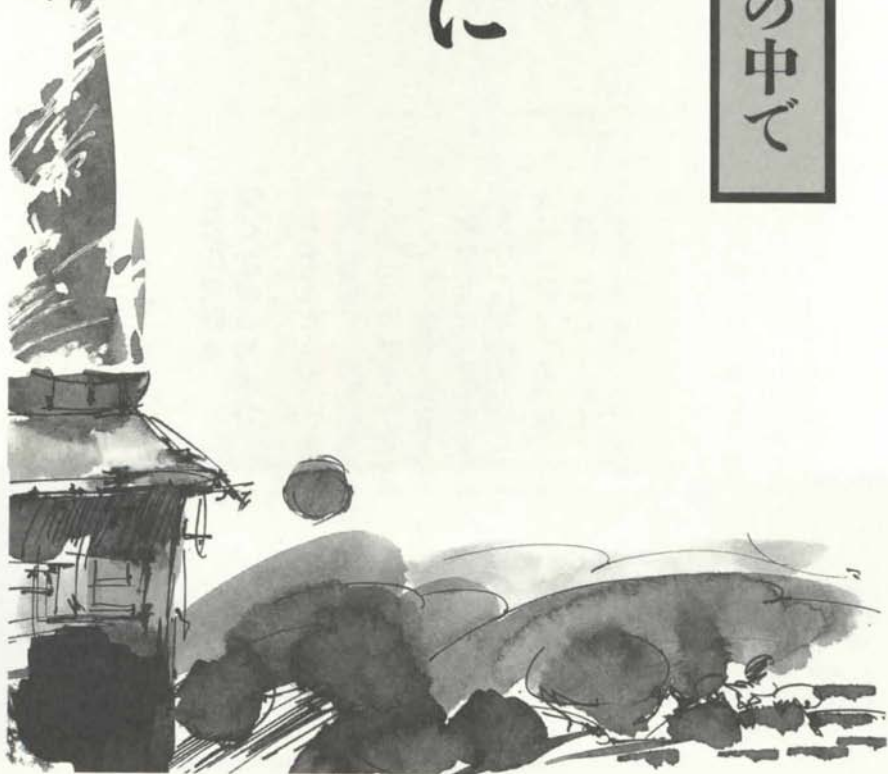
まさにお盆は、先祖の霊を迎えて、一家一族の触れ合い、語らいの格好の場でもあります。盆のひとときを名香を聞き静かに人生に思いをめぐらすことは、ただでさえ忙しい現代人にとって、十分に意義のあることだと思えます。

続

午後の日差しの中で

山のあなたに  
住むという

吉川英明



五月の半ば、まさに風薫るころ、宮崎県の椎葉村へ行ってきた。

椎葉村といえば「ああ、あの平家落人で有名な村」とうなずく人は多いだろう。

そう、平家落人伝説、殊に那須大八郎と鶴富姫の悲恋物語、そしてそれを歌って稗搦節<sup>ひろうせふし</sup>で名高い所だ。

私が椎葉村の名を初めて聞いたのは、昭和二十五年、小学校六年生の時のことだった。

私の父英治が『新・平家物語』の取材で宮崎を訪れ、大八郎、鶴富の悲話と稗搦節のレコードを持ち帰ったのである。

父はこの歌がいたく気に入って、来る人来る人に聞かせていた。小学生の私にも、哀調を帯びたこの歌の心が次第に伝わってきて、いつかも椎葉というところへ行ってみたいものだと、子供心に願うようになっていた。

父自身は、その取材旅行では、宮崎で体調を崩し、予定していた椎葉までは行かれなかった。後々まで、一度行ってみたいものだと洩らしていたのだが、その願いはついに果た

せずに終わった。

だが、父が亡くなる直前、村に出来たダム湖の名付け親になったことなどもあって、椎葉村と我が家との縁は続いていた。私も、椎葉村の黒木勝実助役に、十年ほど前から「一度遊びに来ませんか」とお誘いを受けていたのだが、中々機会がみつからなかったのだ。

その念願がやっと叶った。午前中に宮崎について、東郷町の若山牧水記念館、南郷村の百済の里を見学しながら椎葉へ向かった。

行くほどに、つづら折りの道が険しくなり、次第に山懷に分け入って行く。日も西に傾いて随分と山奥に來たなと思っていると、峠に出たのだろう、ふっと目の前が開けた。

「もう、そこが椎葉です。あのずっと先の山まで、全部椎葉です」

黒木氏にそう指差されて、私は息を呑んだ。見渡す限り山また山……。累々たる山並いや、山波とても表現したいような果てしない九州中央山地の連なりが、目の前に広がっていた。

そして、その真上の空には、今まさに落ちようとする大きな夕日があった。赤みを帯びた金色の光が、折り重なる山々の肌を藍色の濃淡に染め分け、全山、寂として不動である（この藍色の静寂の底に、本当に人々の営みがあるのだろうか？）

そう疑いたくなるほど、神秘的な光景だった。一面、広大なうねる樹海だ。

伝説をそのまま信じるとして、源氏の追討軍を率いた那須大八郎が入ってきたのは、もつと北側からの道だろう。当時の騎馬と徒の行程では、大八郎も、途次同じような光景を何度も見たに違いない。そして彼の胸には、この荘厳な大自然の奥にまで、俗世の争いを持ち込むことの愚かさを惧れる気持ち、次第に芽生えていったのではなからうか。

そんな思いを馳せながら村に近づくにつれ、周囲には次第に現代が甦ってきた。高圧の送電線が頭上を横切り、車が行き交い、人家も増えてくる。

国の重要文化財に指定されている鶴富屋敷

の周囲も駐車場の工事中だった。

だが、さすがに屋敷の佇まいは、鄙びた中にも凛とした気品がある。黒光りのする櫓の一枚板に覆われた座敷へ上がると、そこには本物の古さだけが持つ、一種侵し難い威厳のような空気が漲っていた。

翌日は、まず上榎葉ダムへ向かった。先に書いたように、このダムの湖に父が「日向榎葉湖」と名前をつけている。

ダムと湖を見下ろす展望所の一角に、紛うかたない父の字で「日向榎葉湖」と彫り込んでいる清楚な石碑が立っていた。

黒木氏に聞けば、榎葉村からの依頼で父がこれを揮毫したのは昭和三十七年のことだという。父はその年の七月には癌の転移が見つかって再入院し九月に亡くなっている。大きな文字としては、恐らくこれが絶筆であろう。何とも言えない懐かしさが胸を満たした。

石碑に近づき、碑の周囲を巡っているうち、私は奇妙な感覚に捉えられた。そこにいるのが初めてではないような気がしてきたのだ。

石碑の写真を以前から見えていたせいかもしれないが、それだけではなさそうだ。昨夜宿まった鶴富屋敷の庭にも、父が稗搦節の一節を揮毫した文字が石碑になっているのだが、それを見た時にもこんな感覚はなかった。

父の文字や、石碑への懐かしさだけでなく、湖やダムに見えるその場所を以前から知っていたという感じなのだ。もちろん、はっきりとした記憶ではなく、夢の中で見たことのあるような漠とした感覚なのだが、まるっきり初めての場所とは、明らかに違う何かがあるにはあった。

以前にも二度ほど、初めての場所でも、同じような感覚に襲われた経験があつて、こういうのを「デジャヴユ」或は「既視感」というのだろうかと思つていたのだが、こうして、父と所縁の場所でも、そんな感じに包まれたのは、何とも奇妙な気持ちだった。

それと、ここに来て心を打たれたのは、鶴富屋敷の稗搦節の碑といい、この日向椎葉湖の碑といい、実に丁寧に、きれいに管理され

ていることだった。

これまであちこちで、様々な碑を見てきたが、中には、放置され荒れ果てて、遺族には見せたくないと思われるような碑もあった。椎葉の人々の暖かい心を見る思いがしてうれしかった。

椎葉は広い。東京二十三区の四分の一の面積だという。そこに五千人足らずの人口である。東京近郊のように「まだ自然が残っている」などという次元の話ではない。大自然の中に、人間の集落がぼつんぼつんと紛れ込んでいるという環境である。ここでは、人間の方が生かされているという感じがした。

村の中心部でも、下界からみれば青葉の色は若かったが、更に山中に入つて行くと、そこはまだ春だった。萌える新緑の中に山桜が点在し、どこに行つても鶯の声に囲まれる。

昼食後、今では椎葉だけにしか残っていないという焼畑農法を見に行った。焼畑というのは、急斜面の樹木を伐採した後敷を焼いて土地を肥やし、蕎麦、稗、小豆などを輪作し

ていく原始農法である。

まず、焼畑資料館へ立ち寄ってビデオを見せてもらった。藪を焼く「火入れの神事」などを見ていると、この農法は日本人という農耕民俗の原風景をそのまま伝えていたのだという思いを濃くする。自然を敬い、畏れ、そして共存しているという古代人の願いを色濃く伝えていて、胸を打つのだ。

例えば、火入れの神事では、火をつける前に、藪に簡素な祭壇を設えて供え物をし、伝承に従ってこんな呪文を唱える。

「これよりこのヤボに火を入れ申す。へび、わくどう、虫けら、早々に立ち退きたもうれ。山の神様、火の神様、お地藏さま、どうぞ火があまらぬよう、また、焼き残りのないよう、おん守りあつてたもうれ」

ヤボは藪のこと、わくどうというのは、がま蛙のことだと教わった。また、火があまらぬようというのは、燃え広がらないようにという意味である。

つまり、焼畑で一番恐ろしい山火事になら

ないように祈っているのだが、その前に、蛇や蛙、そして小さな虫たちにも思いを懸け、これから火をつけるから早く逃げろと行っている。自然の中で生きる人々が受け継いできた思いやり、優しさなのだろう。

この小学校では、この焼畑農法の実習を正課に取り入れ、児童総出で作業を手伝う。この学校にはいい匂いはない。

その夜、焼畑農法を継承している椎葉秀行氏の「民宿焼畑」に宿を取った。秀行氏はお留守だったが、椎葉の植物の生き字引といわれる奥様のクニ子さんの山菜料理に舌鼓を打ち、様々な山の植物を漬け込んだ焼酎を堪能した。どれも目に珍しく、美味しかったが、私は、クロモジとキハダの焼酎が特に気に入って大いに飲んだ。

宴たけなわのころ、お椀が出た。味噌汁の中の盛り沢山の野菜に混じって、何か白っぽい具が浮いている。

「名物のわくどう汁……おいしいですよ」

「えっ？」

クニ子さんの言葉に、私は一瞬酔いも醒め果てて飛び上がった。申し訳ないが、がま蛙の味噌汁だけは、何としても食べられない。「すみません。これだけは勘弁してください」

膝を正して謝ろうとする私を見て、クニ子さんと黒木氏が、腹を抱えている。

「大丈夫ですよ、吉川さん。それはね、蕎麦粉を練ったお団子、蕎麦掻きのようなものですよ。煮えたぎった汁の中で踊る様子を蛙に見立てて、わくどう汁というんです」

黒木氏の言葉に胸を撫で下ろしたが、何とも人の悪い名前だと冷や汗を拭った。

食べると美味しい。手作りの味噌のやや濃い目の味が、蕎麦掻きの柔らかい肌になじんで、素朴な香りが何とも言えない。酔いも醒めかけましたというのを口実に、またキハダ焼酎の杯を重ねたことだった。

道路が整備され、交通の便がよくなったとはいっても、椎葉は未だに秘境である。広大な椎葉の山中に点在する二十六の集落は、都

会人の脚では行き来もままなるまい。

樹齢八百年、根廻り、十九メートルという巨大な杉や、樹冠が三十メートル四方に広がっている怪異な大檜も、椎葉村にあるとさしたる偉観とは見えない。他の土地に置いたら異様にさえ見えるであろうこれらの天然記念物も、椎葉の大きな自然は、さり気なくその風景の中に取り込んでしまう。

そして、椎葉、那須、という姓が圧倒的に多いこの村の人々の表情の、なんと明るく温和なことだろう。

帰途、宮崎の街で美味に巡り合い、微醺を帯びたまま羽田に降り立った私の目に、新しい空港ターミナルの華麗なビルが、何とも空虚な作り物に映った。

(作家)

東京で釣り堀に行った時のことである。

入り口で、釣り堀の主人から「お客さん、どんどんたくさん釣りたい方かね、それともゆっくり釣りを楽しみたい方かね、うちじゃお客さんの好みのよって、案内する堀が違うんだよ」と言われ、それならば両方を楽しみたいと言った。

最初にたくさん釣れる堀の方でまず糸を垂らすと、魚は我先にと争うように餌にかぶりついてきた。そこで次にゆっくり楽

しみたい堀の方へ行き、同じ様に糸を垂らすと、今度はどうだろう、たくさん釣れる魚がいるにもかかわらず、どの魚も見向きもしないのである。

これはきつと、最初の堀、つまりどんどん釣れる堀の魚には餌をまったくあげておらず、次の堀、ちつとも釣れない堀の魚には、定期的にたくさん釣れる餌をあげているのに違いがないと思ひ、釣り堀の主人に聞いてみた。

「確かに餌の上げ方ですよ。でもね、本当はお客さんの言った

## 釣り堀の魚たち

逆なんです。つまり魚が食いつく方には定期的にたくさん釣れる餌を上げています。だから魚はどんどん大きくなり、もっとたくさん釣る必要として、がつついてくるんです。でも魚が見向きもしない方には、時々しか餌を与えていません。だから魚は餌を食べなくてもいいような体になり、がつつかないんですよ」

人間の欲望もこの魚と変わらないだろう、釣られてしまうのは欲の多いほうのようだ。(丁)

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

〒六二五 京都市右京区

西京極南衣手町七四

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五―三一四―七七六八

FAX 〇七五―三一五―三七五三



# FORUM

## 浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

とどしどし編集部にお寄せ下さい。

## 誌上詩壇

花丸

中西泰代（長野）

白い壁にはられた  
八十五才の義母の

習字は

大きな花丸が

いっぱい

それを見る 私の目も

花丸

# 句会便り (東京 貞源寺)

菜種梅雨出湯の菓子にて持てなさる  
木の芽時旅への思ひの古マツチ

石田良吉

仲春の集ひ散会延ばしけり  
春一番園児の列の右左

黒川清虚

五十年の春未だ戦災孤児  
迷いつつ初蝶同行二人かな

前沢智恵

うかうかと猫の添寝の目借時  
色も香も花それぞれに春なかば

藤木芳清

# 誌上俳壇

万緑や笹舟のごと川下る  
夏草をのせて渦巻く一ところ

たびら雪泉下へ送る和讃亭く  
わが里の気仙語流れる春の風

熊蜂のむくろの腹の太かりき  
たつぷりと濡らすてのひら苔清水

吉田ゆきゑ（東京）

佐藤雅子（山形）

松本厚子（東京）

# 吉野法衣店

各大本山御用達浄土宗袈裟法衣専門



〒160 東京都新宿区南元町17  
TEL 03-3355-2168  
振替 東京21176372

青蜥蜴くぐりし草の濡れてゐし  
振りわけに葉草干して梅雨晴間

父の日の一日草をむしりけり  
西方の光ただよふ金魚玉

内堀綾子（東京）

児玉仁良（埼玉）

仏教ルネッサンス、再び  
珠玉の一冊此処に復刻成る

完全復刻

『浄土』昭和十一年十一月號特輯

# 念佛讀本

念仏者必携の書！

執筆者一覽

|    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 江藤 | 島野 | 笹本 | 石井 | 眞野 | 大野 | 佐藤 | 中村 | 椎尾 |
| 澁英 | 禎祥 | 戒淨 | 教道 | 正順 | 法道 | 賢順 | 辨康 | 辨匡 |
|    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|    | 中野 | 松浦 | 梅原 | 矢吹 | 井川 | 稲垣 | 小西 | 佐藤 |
|    | 善英 | 一  | 眞隆 | 慶輝 | 定慶 | 眞我 | 存祐 | 春夫 |

(目次登場順)

平成8年4月、  
堂々の刊行成る！

【特別頒価 二千円—送料込み—】

■申し込み・問い合わせ■

法然上人鑽仰會

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036

# 事務局便り

## 事務局便り

### ●J・FORUM（浄土フォーラム）

ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー（J・FORUM）。毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもともとたくさんさんの作品を、お待ちしております。短歌や俳句、書評随筆や詩、身近な出来事や情報など、先的要領でどんどん応募ください。私たち編集部では、読者の皆さんと一緒に、この「浄土」をより楽しく、すばらしいものにしていきたいと考えております。

1 随筆・歌など：四百字詰め原稿用紙十枚以内  
2 俳句・短歌・川柳など：二首まで  
3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりと気軽に聞かせ下さい。

…適宜

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈いたします。

### ●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。一六月号でもっともよかった記事。

2 今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容  
3 法然上人讃仰会の活動として望むこと。  
4 その他、ご意見、ご感想など。官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。

（住所、氏名、電話番号をお忘れなく）

### 新規会員紹介（敬称略 順不同）

#### 講読会員

|     |     |      |
|-----|-----|------|
| 東京  | 練馬区 | 加藤忠誠 |
| 神奈川 | 川崎市 | 湊 雅子 |
| 東京  | 渋谷区 | 橋本和子 |
| 埼玉  | 和光市 | 黒岩重光 |
| 福島  | 会津組 | 清林寺  |
| 東京  | 城西組 | 長善寺  |

好評  
発売中!!

お寺から檀信徒へ

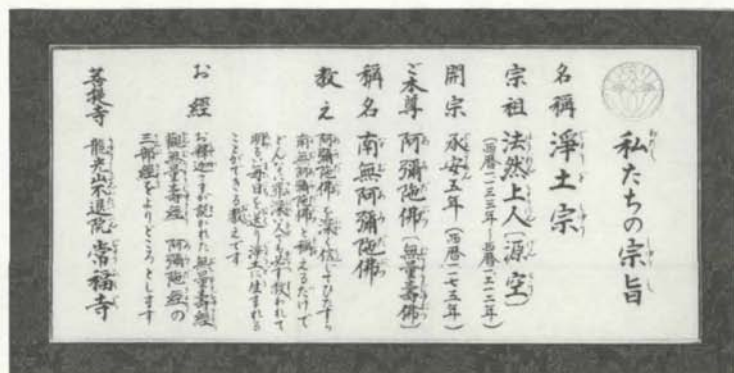
# 宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。

菩提寺とその宗旨がいつでも

ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



定価：大 (32.0×18.3cm) 721円／小 (27.3×14.2cm) 421円

注文・問合せは

**法然上人鑽仰会**

〒105 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036



亡き父の席空けて飲む盆の晩 岱潤

東京の人間にとって今月は何と言ってもお盆の月である。しかし「お盆」は、秋の代表的季語である。これは私のような俳句の素人には、季語の季節感がどうしても納得できない一例である。

確かに「七夕」も「灯籠流し」も秋の季語であり、「卯月」というそのものずばりの言葉が夏であることなど、旧暦に順当していることはわかるが、何かここまで新暦が徹底し、行事もそのほとんどを新暦になおして行っている現代、しっくりこないところがある。

そして「お盆」はその代表だ。棚経の後のビールを思い出すと、夏以外何ものでもないと思ってしまうのは不謹慎だろうか。

ところでお盆というと、お寺の人間はどうしても一年中で一番忙しい時期という思いが消えない。しかし今年こそ、正月と同様に、お盆を楽しみ気持ちを味わいたいと思う。今年は亡き父と交える実感を得るために、昔の父の定席を空けてみようかなと思っている。

今月号からまた吉川英明氏に、随筆の連載をお願いした。九四年一月号から十三回にわたり執筆いただいた、多くの読者からその軽妙なタツチと鋭い切り口にご好評いただいていたので、待望されていた方も多かったと思う。吉川先生は存じのとおりの文豪吉川英治氏のご子息であり、また最近では文学賞も受賞され、小説家としてマスコミに取り上げられることも多く、お忙しいところを無理にお願いしたものである。

(長)

編集チーフ  
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

太田正孝

石上俊教

佐山哲郎

編集協力

オフィス類代産 佐山哲郎

編集顧問

大室了晴

浄土

六十二巻七月号 頒価六百元  
年間費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可  
印刷—平成八年六月二十五日  
発行—平成八年七月一日

編集人 宮林昭彦

発行人 牧田諦亮

印刷所 株式会社 平文社

写真植字 株式会社 シーティイ

〒一〇五 東京都港区芝公園四十七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三七



使えるよなあ、こいつ。



こんどのパルサーは、  
たのしい新実用主義。

- いろんな機能性に、ヨロコビがあるのが新しいのだ。それが、
- こんどのパルサーのたのしい新実用主義。しっかり遊ぶ、
- しっかり仕事する。しっかり生活する。Mr.しっかりのこれからを、
- 気持ちよくサポートします。

これ安心

■運転席SRSエアバッグ  
システム全車標準装備。



走る走る

- 改良、マルチリンクビームサスペンション(リヤ)。
- うれしい低燃費=1500X(15速フロアシフト) 18.2km/ℓ、1500REZZO(5速フロアシフト) 19.8km/ℓ、10-15モード燃費/運転者1人乗時。

らくちん

- 上質感のある、しなやかな乗りこなし。
- ゆったり室内スペース。

ツイてる

- 新型エアコン。
- トランク、ポケット等、収納性じょうず。

パルサー4ドアセダン  
1500CJ(15速フロアシフト)

131.3万円

パルサー4ドアセダン  
1500X(15速フロアシフト)

148.4万円

上記価格にはメーカーオプション(※乗客1人乗時)12.1万円がふられておりません。

上記価格はいずれも全国メーカー各営業小売価格(※車、北海道・沖縄)

# Mr. しっかり 新パルサー誕生

【Mr.しっかり】日常フダン活用。①新パルサーの別名。②新パルサーに乗る人の愛称。  
③～状態……新パルサーでたのしい人生を送っている様子。

●PHOTO「パルサー4ドアセダン1500X」ボディカラーはブルーインジュニルバーM(※KG1)。スポーツパッケージはメーカーオプション。●希望小売価格はスベアタイヤ・標準工具付。寒冷地仕様は17万円高となります。●保険料、税金(消費税含む)、登録等に付く諸費用は別途申し受けます。●希望小売価格は参考価格です。価格は販売会社が独自に決めておりますのでそれぞれの販売会社にお問い合わせください。●日産自動車 お客様相談室 全国共通フリーダイヤル 0120-315-232 ●お求めは、お近くのスカイライン、ブルーバード、日産チェリー各販売会社へ。



みんな、自分の星を追いかけている。

# 駆けぬける 喉ごし。

息もつかせぬ爽快感。おいしいビールは、  
喉をまっすぐに走ります。胸に一本の滝をつくります。  
やすらぎと勇気をあたえてくれるもの。あなたの金星、黒ラベル。

## サッポロ〈生〉黒ラベル



ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ



ご協力をお願いします。リサイクルマークによる酒類の回収は、7月1日(土)から7月31日(土)までです。

サッポロビール株式会社